

『私の手紙はいま何処に』

—天高く猫眠る星Ⅱシリーズ1—

第一章 「一枚のはがき」

眩しいくらいの陽差しの中で汗を流して、時おり空を見上げては何かを確認するような仕草をしながら首に巻いたタオルでその汗をぬぐう。空に何かがある訳でもなく、本当に何かがある訳でもなかった。ただ、そうしたい何かがある心の中で衝動となってそうした行動となっていることだけは確かだった。

「ピーツ、ピーツ、ピーツ。」

オレンジ畑の真ん中で、その似つかわしくない唐突な音に男は反射的に顔を向けた。音はその男の荷物から聞こえてくる物だった。信じたくないとも言うように首を何度かかしげ、そして意を決して慎重にその音に近づく。

「はい、和岐ですが……。」

その音はどうやら通信端末機のような音だった。しかし、今まで聞いたこともないような音を鳴らしていたのは、男の不安をかきたてるには充分すぎたのかもしれない。それとも、何か予感めいたものがあつたからかもしれない。

「グレンだ、久しぶりだな。」

「グレン！グレン大佐か？」

それはこの男にとって懐かしい旧友の声だった。しかし、それだけでは不安を拭うことはできない。いや、むしろこの男が電話をかけてきたことそのものを考えると不安が大きくなる思いすらあつた。でも、ほんの一瞬だけ心の中に不思議な風が吹き抜けたことだけは確かだった。

「いま木星に来ているんだ。少しの時間でもいい。会うことができないか？」

「仕事の話しか？」

「違う……と言っても、結局は仕事の話しになるだろうな。無理に聞いてくれとは言わないが、たまにはこんな顔を見るのも悪くはなからうと思ってな。」

グレンという男の顔が少しだけ頭の中に浮かぶ。不器用そうな表情で少しだけそっぽを向いている仕草が見えてくる。和岐は少しだけ考えて、何回か頭を左右に振ってみた。こうすることで何か吹っ切れるわけではないが、それでも決断するには必要な仕草だったのかもしれない。

「ああ、分かった。どうせ近くまで来ているんだろう？こんな時間にスペースポートに着く定期便は無いし。個人の船で来たならすぐ分かる。」

「ありがとう。15分後にはそちらに着けると思う。」

それだけ言うと通信は切れていた。昔からだ、必要なことだけ言ってすぐ切るのは相変わらずである。

「しかし、この番号もそろそろ変えないと駄目かな……。」

和岐はいま自分が握り締めている通信端末機を見ながらそうポツリと独り言を言った。

連邦政治局を辞めてからもういったい何年が過ぎ去ったことだろう。最後に連邦政治局を訪れた

のは今から10年も前のことである。あれは *POWLA II* が完成した時の話だ。あの後、木星に戻ってまたオレンジを作る日々が続いている。こんな田舎暮らしもすっかりと身に染み付いてる今となっては、連邦政治局での日々はただ懐かしいだけで思い出にしかならなかった。もし地球に戻れと言われても行く気が起きないのは単に年のせいだけではないと思う。

元連邦委員長の所在を連邦政治局の情報部が知っているといっても何の不思議はないのかもしれない。しかもグレンは元々和岐とは仲が良かったし、情報部の中にも今だ親交がある者もいるのは事実だった。しかし、和岐とて連邦委員長まで務めた者であり、情報部のやり方などは情報部の人間と同様に知っていたはずだ。色々なことを知っているということは、それを防ぐこともできるという意味でもある。しかし、今の電話のかけ方は明らかに和岐のプライベート番号を知っている者でなければできないやり方だった。この場所を知っているということより、和岐にとってはそのほうが気がかりだった。つまり、それだけ事の重要度を表していると言っても過言ではないからなのだ。

しかし、せっかくの再会にオレンジ畑の真ん中というのも無粋というものだろう。いくらグレンが和岐の所在を知っているからと言って、いま何をしているかまで知っているとは思にくい。いや、そう信じたい。10年の間に和岐が知らない革新が起きていなければの話だが…。

「まあ、会えば分かるさ。」

誰が聞いている訳でもないのだが、再び独り言を漏らして、和岐はゆっくりと身体を動かした。今から家に戻っても、お茶を入れるには充分すぎる時間が取れるだろう。木星にはここでしか生息しない不思議なお茶があった。和岐はオレンジ畑の一角でそのお茶の栽培もやっているのだ。

家の方へ歩き出した時、既に家の前に誰かがいるのが見えた。少なくともそれがグレンではないことは分かる。いくら久しぶりに会うからといって旧友を間違えるほど見忘れていた訳ではない。また、いかにグレンが変装の名人だとはいえ、わざわざ事前に電話までかけてきて変装する理由など無いはずだ。

「あのお、和岐さんのお宅はこちらでよろしいでしょうか？」

「はい、そうです。」

赤と白の縞模様の制服に身を包んだ若い男性が一人…。たしか最近このへんにも営業所ができたとかいうコンビニエンス・サービスだ。物の配送などもしているのは聞いていたが、パーミリオんキヤットへも配送開始という宣伝が随分と目を引いていたのを覚えている。

「お届けものです。こちらにサインをお願いできますか。」

男性が差し出したのは水色の封筒が一通。宛先も書いてなければ差出人も書いていない。

「サインはどこに？」

「こちらです。ここに。」

和岐にその水色の封筒を先に渡すと、脇から書類を出してきてサインをする場所を指差しながらペンを突きつける。和岐は少し考えてから漢字でサインをした。

「へえ、あんた日本圏の人なんだ。いや、漢字でサインする人って初めてだ。」

これまでの行儀正しい態度が急に砕けた調子になる。いや、本当にビックリしたのかもしれない。今どき漢字を使う日本人自体が少ないだろうし、ましてやここ木星では日本人など数えるほどしかいないというのもあった。

「漢字なんて少し勉強すれば誰でも書けるようになるさ。」

まあ、あなたが外れてはいないだろう。地球あたりの暇な金持ちはカルチャー講座の一つとして漢字を勉強するのが流行とかニュースラインで流れていたような気がする。ただ、名前を漢字でかけるようになることと日本語を使いこなすことには天と地ほどの差がある訳なんだが。

「ありがとうございましたあ。」

男性は元の礼儀正しさを取り戻すと深々と頭を下げ去って行った。和岐の手元に一通の水色封筒を残して…。

さて、この物珍しい手紙を手にして少し考え込んでしまった。いったい何が入っているのだろうか。普通に考えれば手紙が入っているのだろう。しかし、誰が？何のために？こんな時代に誰がこんな古風な方法で文章を送ってくるのだろうか。ただ文字を送りたいだけなら、電子メールを使った方が遥かに早いし簡単だ。他人に知られたくないというならコールサインを付ければ目的の相手にしか見ることができないだろう。だいたい、POWLAシステム上で得られない情報がない現代で、単に情報を送りつけてくるにはは大袈裟すぎる。それとも何か他の物が入っているのだろうか。少なくとも固形物が入っているような感触は感じられない。

開けてみないことには解決しないだろうと分かっているが、頭の中で何か納得できる答えを捜しているような感じだった。いい加減、自分自身が嫌になって封筒から視線を外した先にグレン大佐が立っていた。

「妙な物を持っているな。」

木星の日差しはこの時期かなり強い。それを考えるとかなり奇抜な格好と言わざるを得ないだろう。上から下まで黒尽くめの服装で、しかもマントを羽織っているといういでたちだ。暑くはないのだろうかと余計な心配をしたくなる。

「久々に会った旧友にかける言葉がそれかい？」

わざと挑発するような感じで封筒をグレン大佐の方に差し出す。

「これを何だと思う？たった今コンビニエンス・サービスが配達してきたんだ。」

グレンは面白そうに和岐から封筒を受取ると手の中で感触を確かめている。時折、陽にすかしてみながら首を横に振ってみた。

「難問だな。私の経験上これはただの手紙にしか見えないよ。ただ、こんなもん見るのは20年ぶりくらいか。」

「そうかもしれないな。」

まあ、いつまでも遊んでいるのも意味がないのかもしれない。和岐は思い切ってその水色の封筒の端を指で破ってみせる。中から出てきたのはなぜか絵葉書だった。しかも差出人もメッセージも何も書いていない奴だった。裏面は風景写真だが、和岐にはその風景がどこの物かまでは知らなかった。

「この場所に見覚えは？」

「この場所に見覚えは？」

絵葉書の写真に覗きこんだグレン大佐と和岐がほぼ同時に同じ台詞をお互いに投げつけ、すぐに二人の表情がともに苦笑いになる。

蒼い風景と言うのが一番かもしれない。海なのか空なのかなんとも判断がつかない。ただ色々な青い色が微妙なグラデーションを奏でている。時折アクセントのように見えている白っぽい線が人工物のようにも見えるし、偶然の産物にも見える。もう少し具体的な建物が写っていればヒントに

なるかもしれないが。

「どうにもならないな。まあ、こんなところで話していても仕方ない。中に入れてくれ。いまお茶くらいご馳走するよ。」

和岐が目の前の家を指し示すと先に入れていく。グレン大佐は唇の端を少し歪ませて、すぐに真顔になって和岐に続いた。

第一章 「一枚のはがき」

H17. 6. MAR

第二章 「黒山羊さんから」

ゆっくりとした動きでキャットテイルXの軌道にシンクロする。ここからはほぼ自動で任せておいても問題ないだろう。

久々に休暇が取れてここパーミリオンキャットにやってきた。最近では直接キャティに降りることはできなくなり、軌道衛星のキャットテイルXに接続することになっていた。最初は戸惑いながらやっていた職員たちも、もう5年目ともなっていて落ち着いて作業している。

「フィッツリーは5番ポッドに入ります。既に手続きは完了していますので、そのまま中央フロアまでおいで下さい。キャティ行きのシャトルは15分後に2番ゲートからの出発になります。」

「了解。ありがとう。」

聞き覚えのある女性の声が船内のスピーカーから響いてくる。

キャットテイルXが完成してからもう7年になる。地球圏からの観光が解禁になったことを受け、正式に連邦政治局から職員がキャティにやってきて新たにキャティ支部が置かれた。当初は観光客の受け入れとキャティへ新たな産業を開拓するという目的で設立されたこともあり、文化部のみが設置され初代の室長には湯浅大尉が就いていた。ここで新規に職員を募ったこともあり、現在では7名がここで働いている。

いま案内をしてくれた彼女もキャティの住人だ。もう知り合ってから10年は経つかも知れない。元々湯浅大尉には憧れていたということだったから、ここに連邦政治局の支部が設置され、その責任者が湯浅大尉と知った瞬間にその場で手を上げていた。現在ではこのオペレータの中では一番仕事ができるという噂だ。

小型探査艇フィッツリーのメモリーから必要な情報だけをシエルにコピーすると、プロテクトをかけてフィッツリーのパワーを落とした。あとはこのメンテナンスに任せておけば大丈夫だろう。中央フロアに降り立つといつものように彼女が待っている。

「ミヨシ！久しぶりです。今回はどれくらいこっちにいられるのですか？」

さっきまでフィッツリーの誘導を担当してくれた彼女…彼女の名前はミクラ、いつもこうして中央フロアまで出迎えてくれる。

「今回は珍しく休暇が取れたからね。10日間くらいこっちにいてもいいよ。」

「嘘ばかり。ユアサが言っていましたよ。情報部員の言うことをまともに聞いてはいけません。どうせ今回も仕事で来たんですよね？それとも10日間が嘘なのかな？」

ちょっと上目遣いにホッペをプーッと膨らませて可愛らしく微笑む。こんな辺境なところにないでネットアイドルか何かで売り出せば、きっとすぐにでも男の子たちのファンが大勢つくことだろう。

「残念ながらどっちも外れ。今回は本当に休暇だよ。まあ、もっとも仕事の方が追っかけてくることはよくあることだから否定しないけどね。」

正直言えば、今回に限らず休暇のときは一度たりとも行き先を残してきたことはないのだが、必ずと言っていいほどRyo先輩からの連絡が入って休暇が取り消しになることが多い。いや、正確に言い直すと休暇中に働かせられているということが多いというべきか…。

「すぐにキャティへ降ります？」

「ん、何か話があるなら急がないけど。」

「できることならあたしにつきあってくれませんか？あと2時間で仕事が終わるんですが、それまで待っていて欲しいな…って駄目ですか？」

「いや、たまにはいいよ。前から約束を放っておいているからね。じゃあ、文化部のオフィスに行ってるよ。仕事が終わったらおいで。一緒にキャティに降りよう。」

「ありがとう。ミヨシ！」

飛び跳ねて首に抱きつく、そのままの勢いで走り去っていく。こっちは身体のバランスを崩しかけて、顔を上げた時には既にミクラの姿は見えなくなっていた。

なんとも羨ましい。ああやって自分の感情を素直に表現ができるところなんかは、自分には足りない部分だと思うし見習わなきゃなとも思う。なんとなく、自然とクスクス笑いがこみ上げてきて押さえがきかなくなる。

周りに人がいなかったのは幸いだったのかもしれない。そうでなかったら、文化部のオフィスに着くまでの間きつと私の顔はにやけたままだったと思うから。いくら休暇中とはいえ、知ってる人もいるようなこんな場所で見られたら、いい笑いの種にされるのが目に見えている。そうでなくとも最近面白いニュースがなくて暇な方もいるようだから。

文化部のオフィスは、シルバー地に2本のブルーのラインが斜めに入っているドアだった。最近はいちいちIDカードを出さなくても所持していれば勝手に認識してくれる。ここキャットテイルXの設備も比較的新しい部類に入ることもあって、自動認識するはずだった…。

開くはずのドアが開く気配がまったくない。まさかフィッツリーの中にIDカードを置いてきてしまったかと思い、胸ポケットを探してみるがIDカードはいつもの場所にきちんとあった。これが古いステーションだとIDカード認識用のスロットがドア近くにあるので、そのスロットにカードを読み込ませたりするんだが、あいにくとそんなスロットすら見当たらない。しばらく手に持ったままドアの前を行ったり来たりしてみたが、ドアはまったく反応する気配もない。

思い通りの休暇を取ったことなどなかったが、ここまでひどい状態になったこともない。まさか、このままキャティに降りることも叶わないんじゃないだろうな…と思ったところで、不意にドアが開いて中から一人職員が出てきた。

「あら、三好せんばい…。どうしてこんなところに…。」

中から出てきたのは明子ちゃん。目を大きく見開いて本当に驚いているようだった。

「IDカードが不良みたいだね。ドアが開かなくて困っていたんだ。」

手に持っていたIDカードを見せながら、努めて平静に状況を説明しようと試みた。

「はあ…。まあ、中に入って下さい。私は打合せに出ますが、自分で処理できますよね？」

「ああ、ありがとう。あとは大丈夫…だと思う。」

疑わしそうに大きな目でグリッと睨まれて、もう一度大きく溜息をついて足早に行ってしまった。まあ、何というか、今までが今までだったから信用がないのは自覚しているけど、人の顔を見るたびに溜息をつくのはなんとかしてほしい。

オフィスの中には職員が3人ほどいて、みんな端末の画面を見ていて誰もこちらに注意を払う者もいなかった。グルッと見渡して、とくに3人とも知っているという顔ではなかったので、少し大きめの声を出してみる。

「情報部の三好です。すいませんが端末を一台お借りします。」

ようやく3人とも振り返ってこっちを見てくれた。こういうことはあまり珍しいことでもないの

か、小さく頷くとすぐに自分の仕事に戻ってしまう。こっちとしてもあれこれと聞かれるよりはましなので、黙って手近の *POWLA II* の前に座った。

I Dカードの不具合は直属の上司にしか処理できないと聞いている。私の場合は室長の *Ryo* 先輩になる訳なんだけど、I Dカードが壊れているとするとコールサインが送れないために、どこにいるのか分からない *Ryo* 先輩と連絡が取れる可能性がとても低い。しかし、やってみるしかないだろう。

POWLA II の端末機に自分の I Dカードをセットして *Ryo* 先輩を呼んでみる。1分ほど待って反応がないことを確認する。だいたい1分で返事がない場合は、連絡をしたくないような事態になっているか、本当に問題が起きているかのどちらかであると思っていい。今回の場合はたぶん後者の可能性のほうが高いわけで、分かってはいたものの少し悲しかった。次回の報告で I Dカード不具合時の処理手順の見直しを進言した方がいいかもしれない。

仕方がないので、他に誰か処理ができる上司を見つけるしかないな。とは言うものの、そんな簡単に代わりが見つかるわけも無く、しばらくポーツと *POWLA II* を見つめて、無駄に時間が過ぎていく。そして、不意に部長の顔が思い浮かぶ。まあ、部長なら文句はないわけで、いやこっちが文句を言われるのか。でも、指揮系統から言えば正しい選択であることは間違いない。ここ一年ほど顔を見てはいないけど、まさか忘れたなどと意地悪なことは言うまい。

コールサインをセットして E C に発信してみる。通常なら5秒とかからないはずの時間が異様に長く感じる。まさか…部長も席にいない？もしかするとこの I Dカードは本当にそこまで壊れている可能性のほうが大きくなってきた。仕方がないので、I Dカードを外して通常のコールで部長を呼んでみる。…まあ、応答するはずはないな。

さて、どうしたものか、本当に *POWLA II* を前に途方に暮れてしまった。もう暫く待っていれば明子ちゃんかミクラがここに来て、何らかの処置をしてもらえるのは確かだったが、なんとはなしにそれはそれで悔しかった。

その時、目の前の *POWLA II* だけが何かを受信していた。ハッとして周囲を見回したが、たしかに受信しているのは目の前の端末だけ。ということはコールサインを使った発信しか考えられない。*Ryo* 先輩か部長が気付いてくれたのか。

しかし、目の前に現れたコールサインは二人のどちらのサインでもなかった。しかも、そのデザインはありえないはずのサインだ。見間違えるはずも無かった。私と同じ山羊座のデザインで、しかも私とは色が逆なのだ。

「…黒い羊。」

思わず口に出してしまい、すぐに気がついて周囲を見回す。幸いにも他の3人は自分の業務に忙しくて私のことを気にする雰囲気はまったくない。黒い羊のコールサインは何度か目にしたことがある。つまり、それは私の知っている人ということになるのだが、理解している範囲ではこの人はもう連邦政治局にはいないはずだった。まあ、連邦政治局にいなくてもコールサインは使えなくはないと思うし、この人ならおおよそどうとでもしてしまうだろうとは思うけど、どうしてこのタイミングで私にコールしてきたのが謎だ。

画面を見ながら考えていた時間はおよそ30秒ほどだったと思う。そして、不意にコールサインは消えてしまった。代わりにメールのアイコンがモニターに浮かび上がる。ハッとして反射的にメールを開けてみると、これは部長からのメールだった。

キャティで合流したい。先に降りていてくれという内容だった。ということは、少なくともこちらの所在と連絡を取りたいという意図は通じたということか…。しかし、なぜメールなのか、あれほどメールの使用を嫌うはずの部長があえてメールを使ってきた理由が分からない。でも、考えても仕方ないだろう。情報部の習慣に従って3回繰り返し文章を読むとすぐに削除した。あとはキャティに降りてから考えよう。

「三好せんぱい。」

明子ちゃんが戻ってきた。

「IDカード、直りました？」

一応は心配してくれたらしい。

「Ryo先輩にも部長にもコネクトできないんだ。でも、部長からはキャティで合流と連絡をもらったから、このままキャティで少し待ってみるよ。どうせキャティに降りればIDは不要だろうから。」

「まあ、そうですね。自動認識ドアはいまのところここだけにしかありませんから。」

そう言って、また深い溜息をつく。なんか言いたげなのは分かるけど、どうも心の中で整理ついてないようで、それが溜息となって出てきているらしい。まあ、おおよその見当はついているけど、あえてこちらからシュレーのことを切り出すつもりもない。

キャティでは小惑星帯へ行くことは固く禁じられている。その一つの理由が私であることが分かっているから、余計にここで何も言いたくないというのもある。10年前に小惑星帯で私は死んだことになっている。実際は死んでなどはいないし、そのことは明子ちゃんも知っている。でも、キャティの公式記録の中では、現在でも私は小惑星帯でアルトロン機の運転を誤り追突したことで、安全なルートが確保できるまでは小惑星帯への侵入は禁止されている。

明子ちゃんがジレンマに陥っているのはよく分かっている。せつかく念願のキャティ勤務になれたのに、シュレーに会うためには小惑星帯を捜すしか方法がない。その小惑星帯へ行く許可を得るためには、10年前の事件について触れなければならなくなる。そうなると虚偽の報告をしていたことが明るみになり、おそらくはキャティ勤務を解除されるのは目に見えている。自分だけならともかくもミクラが巻き添えになるのを恐れていることは明白だ。更にはそれを私に言ったところで、何も解決にならないことを今の明子ちゃんが一番よく知っていることが、明子ちゃんをなおさらに苦惱させている原因に他ならない訳なんだけど。

何か他に話題はないかと考えていたところにミクラの声が頭の上で響く。

「今日は珍しい人がよく来る日みたい。いまワキがここに入ってきたよ。」

「え、和岐さんが？」

さっきのブラックシープのコールサインが脳裏に甦る。本当に和岐さんが近くにいたのか。しかし、木星でオレンジを作っているはずなのに何があつたんだろう。まさか、観光ということでもあるまい。

「次のシャトルですぐキャティに降りるみたいだけど、少し待ってもらおう？」

明子ちゃんがその言葉に反応して反射的に走り出していった。いきなり走り出すところは昔とまったく変わってない。

「湯浅大尉がコンコースに行ったから少し待つように伝えて。」

「はい。」

クスクス笑いを噛み殺しながらミクラにそう伝えて、私はゆっくりと椅子から立ち上がった。さてさて、これからいったい何が起きるのかな……。どういうわけだか何かに期待している自分がいることが妙に嬉しかった。

第二章 「黒山羊さんから」

H17. 10. MAR

第三章 「短冊に願いを込めて」

急に笹を取って来いと言われても、こんなところに笹があるとは思えないのだけど、いったいどうしろと言うのだろう。馬鹿正直にこんな山の中を歩いている自分がだんだん悲しくなってくる。「笹が欲しいの。」

ニッコリ微笑んだ市瀬先輩にこう言われたのは2日前のことだった。

「情報部員だって言うんだったら自力で捜してきてね。」

先輩は私が情報部に入ったのは間違いだったと言い続けている。事あるごとに何か試すような事柄を見つけてきては、私に用事を言いつけて困らせてくれる。室長は見て見ぬふりなのでどうにもならない感じ。

信州のちょっと北の方になら笹があるのではないかと聞いてやってきたけど、2日間まるでその姿を見ていない。もしかしたら誰かがもう全部取って行ってしまったのではないだろうか。それとも初めからここには笹など生えていなかったのかもしれない。どちらにしてもそろそろいい加減ゆっくりと休みたかった。

偶然にも願いが届いたのか休むにはちょうど良いほどの開けた場所まで来た。なぜかその一角だけが草が低く、ちょうど周囲が見渡せる位置だった。おそらくみんな同じ思いを抱いてここで休憩したのだろうか。腰を下ろしてゆっくりと空を見上げる。キャティはどっちの方だっけ？

キャットテイル-セブンを懐かしくもある。もう10年も前に自分から志願して連邦政治局に入れてもらった。最初は文化部、3年後に科学部に異動になって、そして今回は情報部へ……。運のよいことにベルギーで働かせてもらえるのは感謝しなければならないと思う。でも、本当に自分のやりたいことは何だったのだろう。少し疲れているのかもしれない。一度キャティに帰りたい。

「ミヨー、応答して緊急事態が発生よ。」

突然に通信機から市瀬先輩の声が響く。呼び出し音くらい鳴らして欲しい。周囲に他の人がいなかったからいいようなものの、もし誰かいたらどうするつもりだったのだろう。

「市瀬先輩、どうしたのですか？」

「救難信号が出ているのよ。場所はキャティの近くで、なぜか応援要請がうちに来たわ。たぶん、あなたに案内を頼みたいんだと思うんだけど。すぐ戻ってきて。3時間後に出発するわ。」

「まだ、笹が見つかってないのですが……。」

「笹なんて後に決まっているでしょ。サッサと戻ってきて！」

まあ、そう言うとは思ったのですが、一応言っておかないとね。手ぶらで戻ったら、笹はどうしたの？なんて聞かれるのは目に見えている。

でも、キャティの近くで救難信号って……。まさか小惑星帯に誰かが進入したのだろうか。ノンビリしているわけにもいかず、慌てて信州局の科学部を呼び出す。

「くま先輩、聞こえますか？」

「こちら信州支局、笹は見つかったのかい？」

「いえ、緊急事態だそうです。申しわけありませんが至急転送していただいてよろしいでしょうか。」

「了解。すぐに転送を開始するよ。準備はいいかい？」

「はい、お願いします。」

くま先輩が開発した転移装置は、まだ実験段階のうえ、なぜかキャティ人である自分しか成功していない。基本的にキャティ人も地球人も同じはずなのだけど、何世代か離れていた間に何かが変わってしまったのかもしれないとのことだった。最近くま先輩はこの転移装置の改良に専念している。

フワッと浮遊感が襲ってきて、次に視覚がおかしくなる。なんか塗料をメチャクチャに混ぜたような模様が視界いっぱい広がって、それが今度は逆回しになってそれぞれが形を作っていく。それが一瞬の出来事で、次の瞬間には信州支局の科学部の実験室に戻っていた。

「お帰り、ミヨー。何がどうしたって？」

くま先輩が白衣姿で待っていた。

「事情は分からないのですが、キャティの近くで救難信号が出ているらしいです。なぜか応援要請がベルギーの情報部に入って、それで呼び戻されたところです。」

「キャティなら座標があるな。普通に行くより転送した方が早く行かれるけど試してみるかい？」

「試したいのは、くま先輩の方ではないのですか？市瀬先輩に連絡してみます。」

一応、転移装置にも色々と制限があるらしく、事前に座標が登録されているか、もしくは発信機を持っていないと駄目とのことだった。キャティは自分のためにわざわざくま先輩が登録しておいてくれたのかもしれない。

「市瀬先輩、ミヨーです。」

「こっちの準備は完了しているわ。あとどれくらいで戻ってこられるの？」

「サシダ中佐が転移装置でキャティまで送ってくれるということなので試してみます。もし、駄目でもこちらからプリメラで向かいますので、先に行っていただけますか？」

「了解。モタモタしないでよ。」

振り返ると既にくま先輩は準備にとりかかっている。座標の登録はかなり精度を必要とするようで、何度なしに計算し直しているようだった。」

「こちら信州支局科学部。キャットテイルX聞こえますか？」

「こちらキャットテイルX。くま先輩どうしたんですか？」

「ああ、明子ちゃんか。これから転移装置で1名そちらに送るから、先日送った手順でやってほしいんだけど。」

「了解です。準備に5分ほど時間をください。ちなみに転送されるのは誰ですか？」

「ミヨーだよ。」

くま先輩はいくつかのスイッチを入れていきながら、ふと手を止めて振り返った。

「さっきキャティの近くで救難信号が出ていると言ったよね？」

「はい。市瀬先輩からはそれ以上は聞いていませんけど。」

「その割にはキャットテイルXにいる者がノンビリしているのは解せないね。まあ、こちらで心配することではないのかもしれないけど。」

そう言われればそうかもしれない。でも、自分はキャットテイルXができてから、まだキャティに一度も帰っていないので、いったいどういう役割分担になっているのか見当がついていない。もしかすると、まだキャットテイルセブンが救難活動を担当しているという可能性もある。

「くま先輩、こちらの準備はオーケーです。」

「了解。では、これから転送するよ。」

くま先輩は自分の方を向いて、大丈夫とでも言うような感じで確認した後、ゆっくりと手を振る。

「行ってらっしゃい。気をつけるんだよ。」

気をつけろと言われても何をどう気をつけたいのだろう。さっきと同じ浮遊感に続いて視界がおかしくなるところまでは一緒。さっきと違うのは心なしか景色が逆回しになるまでの時間が長いような気がする。耳にキーンという音が聞こえてくる。まるでスカイダイビングでもしているかのような間隔がずっと続いて、急に重力につかまったかのように身体のバランスを崩しかけた。

少し頭がボーっとする。誰かが頭の上で話しかけているのが分かるけど、何を言っているのかが分からない。

「ミヨー、大丈夫？」

ヒンヤリとした物体が額に触れる。その瞬間にぼやけていた意識が急に覚醒するのを感じた。目の前にはミクラの顔があった。ここは…。

身体の自由がまだきかない。どうやら床に倒れこんだようだった。だけど、ミクラがいるということは無事にキャットテイルXには到着したようだった。

「くま先輩、ミヨーの意識は戻ったようですが、まだ身体は動かせないようです。」

「もう少し休ませてやって。どうも転送時の重力調整が合っていなかったようだね。一応、地球とキャティの違いは調整範囲に入れてあったんだけど、途中が問題らしい。」

壁の大きなモニターにくま先輩の顔が映し出されている。だんだんと目の焦点も合ってきて、首を動かす範囲の物ははっきりと見るができるようになった。右手だけ動かして、力が戻ってきたことを確認して身体を起こしかける。

「ミヨー、大丈夫？」

さっきと同じ問い。ミクラとは小さい頃からの幼なじみだ。部屋が近所だったこともあってよく遊んだ仲だった。

「うん、大丈夫。」

完全に上半身を起こして、改めて自分が今いる場所を確認した。壁に大きなモニターがあって、その下には *POWLA II* が置いてあるだけの小さい部屋。部屋の一部がガラス張りで仕切られていて、自分はそのガラスの中にいた。

「この部屋は？」

「転移装置専用の部屋。…と言っても、使ったのは初めてだけど。」

長距離の場合は座標軸の設定が必要になるけど、その座標上に他の物体があっては都合が悪いので、こうやって専用部屋を作ったのかもしれない。

「湯浅大尉、救難信号はどういう状況か分かりますか？」

「小惑星帯の中からはしくて、ちょっと厄介かもしれない。」

やっぱり小惑星帯なのか…。情報部が呼ばれるからそうだとは思っていたけど。

「救助を求めているのはグレン大佐なの。でも、場所が特定できてない。おそらくは強い電磁波を出す小惑星が近くにいるようで、いくらトレースしてもすぐに発信源が移動してしまうようなの。現場にはワキさんと三好せんぱいが行っているからすぐに合流して。」

ミヨシさんがここに…？

「小型艇アコードがいつでも使えるようになっているからゲート2に行って。」

「ゲートまではあたしが案内するわね。」

ミクラが手を差し出す。自分より年上のミクラはこうしていつも自分の手を差し伸べてくれてい

た。それは今でも変わらない優しさを持っている。実験室を出て長い通路を歩きながら不意にミクラに伝えることがあることを思い出した。

「ミクラ、七夕の話を覚えている？」

「コナおばあちゃんがよく話してくれたあの話し？」

コナおばあちゃんとは、子どもの頃に自分たちが住んでいた居住区にいた話し好きのおばあちゃんのことだった。自分たち子どもらを集めては色々な話を聞かせてくれた。

「あの話しの中で笹に願いをかける物があったでしょ。あれの名前が分かったよ。」

「えーっ、本当に?!」

笹の木に願いを書いた紙を取り付けて川に流す風習が地球にはあるとコナおばあちゃんは話してくれた。でも、その願いを書く紙がなんて名前だったのか思い出せなくて、前にミクラとその話しをしたことがあったのだった。

「短冊というらしいよ。」

「*POWLA II*にも登録されていないのによく分かったね。」

「地球でもすべての地域で行なわれていたわけではなくて、昔の日本圏だけで行なわれていたらしいから、今では何も残ってないみたい。」

「あとでその短冊と言う奴の作り方を教えてね。」

「そうだね……。」

実は市瀬先輩に頼まれた笹はそこから始まったのだっけ。でもキャティになら笹がいっぱいあるのが分かっているので、この仕事が終わったら笹を取りにいこう。そして、ミクラと一緒に短冊に願いを込めて飾ってみよう。

第三章 「短冊に願いを込めて」

第四章 「小惑星帯の震動波」

キャティに降りたのはいったい何年振りの事だろう。地球の大気とは少しだけ違う成分のせいかなんとかまわりつくような感覚がつかまとう。それも気のせいだとは分かっているのだが、普通ではない何か私に訴えているようにも感じる。

「まず、どこに行こうか？」

後ろの二人にそう問いかけてみる。一人は湯浅大尉…しばらく会わないうちに大尉に上がったようだった。そして、もう一人はミクラというキャティの少女。以前にも会った事があるらしいが、残念なことにこちらはまったく覚えていない。

「だいたい、和岐さんはここへ何しに来たんですか？唐突にキャティにやってきておいて、どこに行こうかということはないんじゃないんですか？」

まあ、そりゃあそうだ。だが、こちらも当てがあってキャティまで来たわけではないので、正直言うと途方に暮れているというのが合っていると思う。とりあえずは先に来ているはずのグレンを捜すあたりからしないといけないんだろうが、隠れる気になったグレンを私が簡単に捜せるとも思っていないし、必要なら向こうからコンタクトしてくるだろう。

先日、私の手元に届いたはがきを見たグレンの見解は、少なくとも地球ではないだろうとのことだった。木星ならずすべてとは言わないが、おおよそ分かるがこんな風景はどう逆立ちしても見ることは不可能に違いなかった。となると、月か火星かキャティだろうということになった訳なんだが、なぜかグレンが強引にキャティに行こうと言い出したのだ。そう言えば、彼はまだ私に会いに来た理由さえ私に話してなかった。

少なくともキャティまでの彼の行動に不審な点はなかった。もし、はがきの差出人が彼ではなかったとすればなんだが、これは私の能力をもってしても彼の心の中を見ることはできなかった。連邦政治局の中にも能力保持者はいるし、ESP研だってあるくらいだから当然その手の研究は進んでいると見ていいだろう。だとすれば、情報部が能力者を遮蔽する術を持っていても不思議は無いんだと思う。ただ、私の場合は元々の能力にファズアース効果がプラスされているはずなので、ちょっとばかり自信はあったのだが…。

「とりあえずキャットテイル-セブンにでも行きますか？あそこなら設備も整っているし、暫くここにいるんだったら、住居も必要でしょうし。」

なんかこう…湯浅大尉の言い方には少しばかり棘がある。べつに彼女に何かを頼んだ訳ではなかったし、仕事上の彼女に迷惑をかけるつもりはなかったのだが、なぜか一緒にキャットテイルに降りると言い張り、ついてきた挙句に何故かとっても愚痴っぽい。

まあ、それこそ彼女の心の中は手に取るように分かるので、これで彼女の気が済んだったら放っておこうとは思っている。つまりは単純にストレスが溜まっているところに私の顔を見て八つ当たりしているだけのようなのだ。

「じゃあ、そうするか。」

キャットテイル-セブンで思い出したが、三好中尉がさっきまでステーションにいたはずなのだが、シャトルに乗ったあたりから姿が見えなくなっているのが気にかかる。たしか、彼もキャットテイル-セブンに行くようなことを言っていたはずなんだけど。

「そういえば、三好中尉はどこに行ったんだ？」

「知りません。」

ああ、湯浅大尉の機嫌の悪い理由には彼も一枚かんでいるのか……。どうも、湯浅大尉にとって彼はトラウマのようだから、そういう意味では数年前のファズアースでの一件がまだ尾を引いているのかもしれない。しかし、それと私への八つ当たりは関係ないと思うんだが……。

さしあたり何もしないのが一番なのかもしれない。せっかくなので矛先をミクラの方に変えてみる。

「ミクラは連邦政治局で何を希望しているの？」

いきなり話しかけられて予想をしていなかったのかもしれない。一瞬ビクツとして、ゆっくり私の方を見る。

「そういうわけではないのですが……。」

「ミクラは地球に行きたいの。でも、なかなか許可が降りなくて、仕方なしにキャットテイルXであたしのお手伝いをお願いしているの。」

途中から声が小さくなって聞こえなくなったミクラの代わりに、湯浅大尉が事情を説明してくれる。しかし、顔はあっち向いたまま、何かを気にしている様子だった。

「まあ、そういうわけでなんです……。あ、来ました……。」

ああ、そういう訳か……。既にキャットテイルセブンには迎えをお願いしてあったようで、シャトルがこちらに向かってくるのが見えてきた。

湯浅大尉は手を振ってシャトルを止めると、驚いたように無言で私の顔を見る。そして、再びシャトルの方を見て、ミクラに同意を求めるように大きく頷いた。

「まさかバルチェが来るとは思わなかった。」

何年ぶりだろう。もう 10 年は過ぎていような気がする。さすがに連邦政治局を離れてからというものキャティとの交流は途絶えてしまっていた。正確に言えば、キャティと地球との間は少しずつ行き来していたようだが、それが木星にいるとまったくと言っていいほど情報がなかったのだ。つまり、木星とキャティの間では通信手段ですらなかったのだ。

どうも私の顔を見て、向こうも相当驚いているようだった。少なくとも顔を見ても誰だか分からないくらいではなかったのは救いかもしれない。

「ミヨシが連絡くれたのだ。ワキがここに来ているとな。」

シャトルから降りてくると色黒のその手をゆっくり差し出した。私もその手をしっかりと握り返す。

「元気そうでなにより。」

「しかし、ワキがここにいるということを喜ぶべきなのか……。まさか、地球でまた何かあったのか？」

どうも私はバルチェにとっては疫病神か何かと同じなのかもしれない。たしかに過去 2 度とも直接顔を合わせたのは緊急時であったのは事実だ。しかも、ある意味今回もそうかもしれないである以上、苦笑いするしかなさそうだ。

「何もないさ。しかし、何もないといいなと思っているのは私も君と同じだよ。」

ゆっくりとバルチェの思考に波長を合わせていく。バルチェの波長なら覚えている。彼の性格がすっかりと変わっていない限り、イメージは読み取れるはずだった。しかし、グレンの時と同様にまったく同調することはできなかった。

もしかするとのんびりとした木星生活の間に能力が落ちているのかもしれない。ESP研での報告の中に、潜在的な能力を訓練により顕在化するというものがあったが、私の場合はその逆が起きている可能性もある。

「実は数時間前から奇妙な震動波が検知されているのだ。もしかしたら、君が何かを知っているのではないかと思っているのだが……。」

それ以上言うのをあえて止めたような感じだった。

「奇妙な震動波ですか？電磁波ではないのですね？」

ミクラが確認するようにバルチェの言葉を繰り返す。

「ああ、今まで確認したことはない種類だ。しかし、小惑星帯から出ていることは間違いがない。既にミヨシが出発の準備に入っている。もしかすると、ユアサと一緒にいきたいのではないかと気にしていた。」

小惑星帯と聞いて湯浅大尉が俊敏に反応する。

「行きます。三好中尉はキャットテイルセブンにいますね？」

「ああ、クリオンで出る準備をしていたので、もうここに来る頃だろう。ワキはどうする？」

おそらくその震動波にグレンが関わっているだろうと思う。しかし、いまそこへ行っても何もできないという予感が強く心の中で渦巻いている。それよりその震動波そのものがとても気になった。ミクラの電磁波ではないのですか？という確認が何か引っかかる。

「いや、私は一度キャットテイルセブンに行くよ。その震動波を聞いてみたい。」

「では、ワキとミクラはシャトルに乗りたまえ。ユアサはクリオンで小惑星帯に行つて来るといい。」

バルチェが指し示した方向から白い小型の探査艇が近づいて来るのが見えてくる。たぶん、あれがクリオンなんだろう。心持ち昔のアルトロンに似ていなくもない。

「では、また後で。」

既に近づいてくるクリオンを凝視している湯浅大尉を置いて、私はシャトルに乗り込んだ。すぐにミクラが乗り込み、続いてバルチェが運転席につく。出発する直前にもう一度湯浅大尉の姿を見て、不意にどうしようもない不安が襲ってくる。

声をかけようとして、すぐにクリオンの着陸する音でかき消される。バルチェがドアを閉めて発進すると同時に、私の視界から湯浅大尉の姿が消えた。まあ、三好くんも一緒なんだし大丈夫だろう。なんとなく自分自身に言い聞かせるように心の中で何度も繰り返してみる。

「で、ワキがここに来た理由は何なのだ？」

おそらくバルチェはそれを自分で確認したくて、わざわざシャトルを運転してきたのだろう。しかし、私自身もなぜ私がキャティに来たのか分かっていない。どう答えたらいいのか正直分からない。

それともう一つ、グレンがここに一緒に来たことを伝えていいのかが分からない。三好くんはいたいバルチェにどう話したのだろうか。いや、そもそも三好くんはどこまで正しく知っているのだろうか。情報部のコミュニケーションは特殊なので、さすがに現状がどうなっているのかまで把握することができない。

「バケーションさ。たまにはバルチェの顔を見ながら酒を飲み明かすのも悪くはないだろう？」

ま、こんな理由で納得するような相手ではないのは分かっているが、逆に私が素直に理由を話す

気がないことは受取ってくれるだろう。

「シュレーディンガーの猫のことなら止めておくことだ。」

「今さら念押しでもあるまい。その姿を見た者がいるというなら話しは別だが、わざわざ湯浅大尉に許可を出したくらいだ。ここ数年、猫の姿を見たものはいないんだろう？」

「小惑星帯ではな。」

どういうことだ？まるで小惑星以外であれば見た者がいるとでも言いたげな言い方だが。

「…いや、挑発に乗るのは止めておこう。少なくとも今回キャティに来た理由は猫じゃないよ。だが、正直に言えば、なぜここに来たのかは自分自身でも分かっていないんだ。詳しいことが聞きたければ、本当に酒でも用意しておくんだな。」

かなりの期間、小惑星帯への立ち入りは禁止になっていたと聞いている。おそらく、一般民間人に許可が降りるようになったのは、つい最近の話しはずだ。それでさえ、未だに許可制であることには変わりなく、届出のみで自由に立ち入ることが出来るのは連邦政治局の中でも情報部と開発部に限られているはずだった。

バルチェはそこで諦めたのか、キャットテイル-セブンに到着するまでそれ以上何も喋らなかった。まあ、ミクラもいるし、これ以上は話す気が初めからなかったのかもしれない。

見覚えのある建物の前にシャトルが停止する。ここまではほとんど一本道に近く、運転する必要性もなかったように思えるが、バルチェがコンソールから離れなかったおかげで、なんとなく気まずい雰囲気を感じたのかもしれない。あるいはバルチェも同じ思いだったのかもしれない。

「ここはそのままだな。」

前回来たのは最初の交流が始まった時だったから、もうかなり前になる。

「中もそのままだ。もうミヨシからの連絡が入っている頃だろう。そのまま司令室の方へ行こう。」

バルチェを先頭に、続いてミクラ、そして最後にわざとゆっくり私が建物に入っていく。

第四章 「小惑星帯の震動波」

H17. 7. JUL

第五章 「空と大地と大海原」

「そろそろ発信源に最接近します。降りてみますか？」

一応、明子ちゃんの反応を待ってみる。このクリオンに収容してからというもの明子ちゃんが必要最低限の言葉しか発しないつものようだ。シュレーのことが未だ気に病むのか、それともグレン大佐が遭難していることに問題があるのか、いったい何が原因なのかは分からないけどとにかく機嫌が悪いことには間違いがない。

「キャットテイル-セブンに定時報告を入れます。」

グレン大佐が遭難していることは既にキャットテイル-セブンには伝えてあった。しかし、私自身もその理由が分かっていないし、そもそもグレン大佐がどうしてそんなところに行ったのかが分からない。もちろん、情報部のトップの行動を私のような下々の者にいちいち説明するとは思っていないけど。

「こちらクリオン、キャットテイル-セブン応答願います。」

「こちらキャットテイル-セブンだ。状況を報告してくれ。」

コンソールの小さなモニターに司令室の映像が映る。いま話しているのはバルチェだ。その横にワキさんとミクラが見える。

「もうすぐ発信源に最接近します。この後、小惑星に着陸してグレン大佐がいるか確認します。」

「いや、止めておいた方がいい。そのままその小惑星と距離を保って状況だけモニターしてくれ。ワキが震動波の内容を解釈してくれた。いまその内容を転送するよ。」

*POWLA II*でさえ解釈不能だった震動波をワキさんがこんなに早く解釈するなんて……。すぐにモニターに文字が映し出される。

「小惑星に近づくな。異常な電磁波が出ている。機械は役に立たない。グレン。」

明子ちゃんがそのまま読み上げて、そして私の顔をじっと見る。どうしたことなのか私にも分からないが、とにかくグレン大佐が我々に何かを伝えようとしていることだけは確かだった。

「いまESP研に連絡を取った。数時間後には柴野大尉がこちらに到着するだろう。そのうえで改めて作戦を伝えるよ。」

今度はワキさんの声……。既にキャットテイル-セブンでは対応策に動いているというわけか。しかし、柴野さんが呼ばれるなんてよほどのこととしか思えない。ESP研の活動だけは情報部でさえ雲の上の情報で、どうして民間人であるワキさんが簡単に連絡を取れるのか謎だ。

「どうことなんでしょうね？グレンが送ってきた内容といい、ワキさんの対応の仕方といい、湯浅大尉には理由が分かりますか？」

「さあ、グレン大佐のメッセージは理解できないけど、シバちゃんが呼ばれた理由は分かっているわ。」

明子ちゃんは私と目を合わせようともせず、横を向いたままそう答える。それでも会話をしてくれるだけましかもしれない。

「どうことですか？」

「あたしも含めてシバちゃんもみやあも親権者がワキさんなのよ。」

「え？それは……。」

「あたしたち3人は所謂孤児といえればいいのかな。本当の親がいないの。だからワキさんが親な

の。」

…驚いた。明子ちゃんが自分のことをこんな風に話すなんて初めてだったし、その内容そのものにも。ワキさんが親権者であるなら、たとえ民間人であろうとなんだらうと柴野さんと連絡が取れるのは不思議でもなんでもない訳だ。

でも、そうするとワキさんが現れてから明子ちゃんの機嫌がずーっと悪いのは…。

「明子ちゃんが機嫌悪そうだったのは、まさかそれが理由？」

思わず湯浅大尉ではなく明子ちゃんと呼んでしまう。

「まあ、それもあるかな。三好せんぱいのせいでもあるのは事実だけど。でも、シバちゃんがあるんだったら、どうせすぐばれるから話しておこうと思って。」

えーっと、こういう時どうしていいか、正直言って自分の理解を超えてしまった。

「たぶんだけど、シバちゃんが呼ばれたということは、シュレーが近くにいるわ。シュレーたちは通常はこちらから存在が見えないように、特殊なフィールドを作ってその中にいるはず。小惑星帯は単にその入り口にすぎないの。まず、あたしたちが使っている機械は狂わされて役に立たないでしょうね。」

改めてモニター画面を切り替えて小惑星帯を映し出す。現在は震動波発信源から約 100km 離れた位置を周回している。画面で見える限りではただの岩と氷の塊にしか見えない。もし、グレン大佐がいるなら、そこに船が映らないといけないはずだ。

「シバちゃんがESP研に移されたのは、いつかこういう日が来ることを想定して、ワキさんがそうしたんだと思う。あのシュレーたちのフィールドを通り抜けられる可能性があるのは、精神波動と呼ばれる一部の能力保持者しか持たない方法を使っただけだから。シバちゃんはそれが自由に使えるように訓練を受けていたのよ。」

「お…驚いた。いや、情報部でさえ知らないことがあるなんて…。」

「それは違います。情報部が知らないんじゃないくて、三好せんぱいが知らないだけです。あえて言うと、三好せんぱいだけは情報部内で特別な存在だったって知っていました？」

…いったい、明子ちゃんは何を言い出すのだろう。私が情報部内で特別な存在？そんな話しは初めて聞いた。それにしても、さっきから明子ちゃんはクリオンのマニュアルをずっと見ている、こちらに目を向けようともせずに話している。なんとなく、わざと目を合わせないようにしているようにも取れるけど、こうもあっさりと言われると、こっちが拍子抜けしてしまう。

「間抜け…という意味では特別かもしれないね。」

「そういう意味で特別って言ったんじゃないですよ。でも、自覚しているなら直した方がいいかもしれませんけど。」

初めて私の方に向き直りながら、すぐに気がついて視線はマニュアルに戻る。

「三好せんぱいがファズアース事件の時にハスラムとなって連邦政治局に潜入していたことで、連邦政治局内では三好せんぱいとワキさんはかなりパイプが太いと見られているんです。で、三好せんぱいも知っている通り、連邦政治局の上のほうにはワキさんを疎ましがっている人も多いため、本来なら情報部員には流さないといけない情報ですら、ワキさんへの漏洩を恐れて三好せんぱいには流していないんですよ。」

「どうして、そんな…。私だってワキさんがどこにいるのか知らされていないのに…。」

「でも、連絡は取れるでしょ。事実、ワキさんのコールサインを知っているのは、三好せんぱいを

含めても5人しかいないんですよ。」

ワキさんのコールサインは私が情報部へ異動してすぐに教えてもらったものだった。まだ、あの時はキャティ事件の真っ只中だったし、ワキさんも連邦委員長だったし、何も疑問に思わなかったけど、ワキさんは私に何を期待していたんだろう。

「ワキさんはいったい何を捜し続けているんだろう。私にはどこかある場所に行きたいようなことを行っていたけど…。」

「それはあたしにも分からないけど、空と大地と大草原…、そんな言葉を使っていたことがあったわね。あたしはそれ以上追及しなかったけど、みゃあはそれでワキさんの元を離れたんだと思う。だから、きっといつかその答えを持って帰ってくると信じている。それが彼女の存在意義だから。」

「もしかすると、それがシュレーのいる世界？」

「そうかもしれないし、そうでないのかもしれない。」

ああ、少しばかり頭の中が混乱してきた。自分が知らない間に何かが動き出していて、ここ数年静かにその運命の中で操られていたというのか。ワキさんとクマさんの因縁は聞かされていたけど、まさかそこに自分が巻き込まれているとは思わなかった。私が自分の意思で動いていたと思っていたことも、実はワキさんの意思で動いていたというのか…。

冷静に考えてみれば未登録とはいえワキさんだって能力保持者のはずだし、しかもファズアースに行った一人でもある。やろうと思えばいくらでもやれたのは確かだ。しかし、本当にワキさんがそんなことをするだろうか。

「あたしが嘘をついているかもしれませんよ。」

いつのまにかマニュアルを読み終えている明子ちゃんが、クリオンのコンソールを操作しながら、またこちらを見もせずにしれっとそう言う。

「で、明子ちゃんは何をしている訳？」

なんとなく自分だけ蚊帳の外にいる感じで、少々むかついてきた。確かに室長まで勤めている明子ちゃんとペーペーの自分が同じとは思っていないけど、一応は連邦政治局には明子ちゃんより長くいるという自負もあるし、情報部に移ってからはそれなりに自分独自のルートも持っているつもりだ。

自分がワキさん番として連絡係をしていた間もただ連絡だけしていた訳じゃないし、自分で調べられる範囲のことは自分なりに調査したはずだ。その自分がワキさんを信じると決めたんだから、誰がなんと言おうとそうするしかないだろう。

それにシュレーのこともこれまでまったく放っておいた訳じゃない。明子ちゃんには包み隠さず報告はしているし、それなりの成果が上がっていることも認めてくれていたはず。それなのになんでわざわざ喧嘩を売るような真似を…。

喧嘩を売るような…。けんか…？

「もう、いいです。それなら私は勝手に調査します。湯浅大尉、申しわけありませんが、クリオンの方向を変えさせていただきます。」

不意にある一つの考えが頭をもたげる。明子ちゃんがわざと私を怒らせているのだとすれば、なぜ私は怒らなければならないのだろう。もうすぐ柴野大尉がここへやってくると言った以上、おそらくは柴野さんは直接クリオンにレポートしてくるだろう。その時では遅い何かがあるんだ。

「あら、無理だと思いますけど、クリオンの指揮権は既に全機能私の元にあります。あなたが操作

できる機能は何もありませんよ。」

自分の考えに間違いがなければ、明子ちゃんはある状態になることを期待しているんだ。しかもおそらくこの会話を聞いているだろうワキさんに気が付かれずに。さっきクリオンのマニュアルを読んでいたこともそういう意味なんだと思うしかない。

「そんなことはありません。クリオンは戦前の設計です。POWLAは後付けだということを知らなかったようですね。」

たとえ知っていたとしても POWLA を切り離すなんて作業は情報部員と開発部員しかトレーニングを受けていない。つまり、いくら室長といえども文化部員にはできない作業なのだ。ただ、それをやってくれとはいくら明子ちゃんでも正当な理由なしにはできないということだ。

私はコンソール脇に隠してある機械式のスイッチを切り替えて POWLA をクリオンから切り離す。知っていれば大した作業ではないのだが、マニュアルにも載せていない以上知らない人には永遠に見つけれないだろう。

「こうすれば、こちらで操縦することなど造作もないことです。」

機械は特殊フィールドの影響を受けないのだとすれば、小惑星帯に降りる術はこれしかなのだろう。ただし、POWLA なしでの着陸なんてトレーニング以外でやったことが無いのも事実だ。しかし、期待されている以上、ここは一発で決めねばなるまいて。

今まで目を合わそうとしなかった明子ちゃんがようやくニコッと微笑んだ。

第五章 「空と大地と大海原」

H17. 4. SEP

第六章 「狼煙の合図」

おそらくはグレンが小惑星帯のどれかに留まっていることは事実であり、さらにそこから自分の意思で動こうとしていないのも事実だろう。ということは誰かが来てくれるのを待っているということになる。しかも、情報部用の通信手段ではなく、わざわざモールス信号を使ってメッセージを送ってきたということは、特定の誰かにそこへ行って欲しいはずだ。

そこまで考えて、グレンが誰に来て欲しいのかが分からない自分に少し苛ついてくる。単純に私を呼んでいるのであれば、こんな大袈裟なことは必要ないだろう。情報部の誰かでもないとするといいたい誰なんだ。

グレンは小惑星で何を見たのだろうか？もしかすると誰かと一緒なのだろうか？グレンはキャットテイルXに着くとすぐに姿を消してしまった。おそらくは自分用の船を用意してあったのだろう。必要があればどんな形であろうと連絡してくるはずと思って気にしなかったが、その連絡がこんな形であるということは、私に何かを伝えようとしていることは明白だ。

もう一度、今の状況を頭の中で整理してみる。グレンは唐突に木星に現れた。しかもその理由は未だ分からないままだ。そして、私の手元に届けられた一通の手紙。いいたい誰が何の目的でよこしたのか謎のままだった。強引なグレンに誘われるままにキャティまで来たが、ここでグレンは行方不明になった。そして、小惑星帯から送られてきたモールス信号。グレンがこの一連の謎の状況を作り出しているのは明白だが、いいたい何のためにやっているのかはあまりにも情報が足りない。

休暇中という三好中尉がキャティに来ていたのは偶然なんだろうか。それともグレンはそこまで計算していたのだろうか。湯浅大尉の話しでは他の情報部員もここへ来ているということだった。わざわざベルギーから来ているということは、これがそれなりの重大性を持っていると見て間違いないだろう。

グレンがわざわざ私を木星から引きずり出してまでこの場で何かに立ち会わせたいとすれば、シュレーディングアの猫しか考えられない。そこまでは容易に予想がつく。柴野大尉がもうすぐ到着するだろうから、きっと彼女の能力が役立ってくれることだろう。しかし、まだ何か足りないような気がしてモヤモヤした感じが消えてくれない。

「こちらクリオン。いま柴野大尉が合流しました。このまま問題の小惑星に着陸します。」

司令室に三好くんの声が響いて不意に現実の世界に引き戻される。

「*POWLA II*は使えないということを忘れるな。」

「了解。*POWLA II*をダウンしますので暫く通信が切れます。」

三好くんの言葉と同時に映像と音声と同時に消え、指令室内に静寂が訪れる。しかし、次の瞬間モニターに赤いイルカのコールサインが呼び出された。

「レッド・ドルフィン……。市瀬大尉か……。」

このコールサインを覚えていた自分に驚きながらも反射的にこちらのコールサインを送り返す。彼女とはコールサインの交換をしたことは無いが、きっとこれで私がここにいることは認識したはずだ。

「こちらはベルギー所属シルビー。キャットテイルXからの要請によりクリオンの後方支援に入ります。」

「こちらはキャットテイルセブン。情報部の協力を感謝いたします。グレン大佐からのメッセージを転送するので、現在の位置を維持したままをお願いします。」

すぐに先ほどの翻訳結果をシルビー宛に転送する。市瀬大尉のことだからおそらくはこのメッセージを読んでグレンが何を企んでいるかはおおよその見当をつけることだろう。

さっきから感じている違和感は二つあった。一つには私はここにいないなければならないということ。理由が自分にも理解できないのだけど、最前線には行ってはいけなくて何が警告していた。危険という感じではなく、私がそこに行くことでうまくいなくなる…そんな予感がしていた。このキャットテイルセブンは私が最大限に近づけるギリギリの位置で、これ以上は小惑星に近づいてはいけなくて何が心の中で叫んでいるのが分かるのだ。

そして二つ目は何かはまだ足りないということだった。ここまで準備が進み、今まさにクリオンが小惑星に着陸を試みようとしているこの瞬間でさえ、何かはまだ足りない、何かを忘れていたようなそんな気がしてならない。

「シルビーに乗船しているのは誰だ？」

バルチェは少しライラしているのを表情に出しながら、隣に立っているミクラに問いかける。彼もまた前線に出て行けないもどかしさを感じているのだろうか。

「おそらくミヨーと市瀬大尉だと思います。ミヨーの話では他に乗員はいないはずですよ。」

「ミヨーが戻ってきていたのか。」

「ええ、現在彼は情報部の所属ですから、戻ってきたというよりこの件のために派遣されてきたんだと思います。転移装置を使って来たんですよ。早く実用化されればいいのに…」

転移装置がもうそんな段階までできているのか…。自分が連邦政治局にいた時にはまだ理論しか完成していなかったというのに。

あの時はまだ管轄がESP研にあったはずだ。柴野さんのテレポートする能力を解明しようとしていた時で、理屈として能力保持者のテレポートを機械でやることは実現可能とPOWLAの答えは出ていたのだが、具体的な実験方法が何一つとして見つかっていなかった。

機械で代行する方法…？何か心の中で横切るのを感じたが、それは一瞬のできごとでその後姿を確認する間もなく見失ってしまう。この感覚は以前にも感じた事があるような気がする。

そういえば自分の能力を疎ましがっていたのはいつの頃だったのだろうか。こうして何か心の中でモヤモヤと形にならないまま、いつも何かに怯えていたような気がする。自分にとって湯浅大尉たちの存在はウィークポイントと言って構わなかった。しかし、今ではそれが切り札とも言える存在になっている。それは自分の能力が不安定だから故なのか、自分の能力に関係なくなのかよく分からない。

ファズアースでの願いはファズアース圏内で一番効果があるという。いま自分の能力がここまで鈍くなっているということは、ファズアースはもう遠く何光年も離れた位置にいるのか、もしかするともう存在すらしていないのかもしれない。あの時、ファズアースによって能力の上限を上げてしまったせいで、ファズアース効果の衰えと同時に元々の自分の能力まで失ったのかもしれない。果たしてそれが幸せなことなのか不幸なことなのか、残念ながら今の自分には分からない。

「こちらシルビーですが、たった今クリオンが有視界から消失しました。」

市瀬大尉の声が司令室に響く。正面の大型スクリーンにはシルビーの船内が映し出された。市瀬大尉の横にはミヨーと言っただろうか男性が一人立っている。

「消失したとはどういうことだ？もう少し詳しく説明してくれ。」

バルチェがさらにイライラした口調で問いかける。

「クリオンが問題の小惑星に近づき着陸すると思った瞬間、そのまま忽然と消え失せたんです。おそらくはシールドのようなものがこの小惑星に張られていて、視界を遮っているものと思われます。残念ながら現在のシルビーの位置からでは、このシールドがどういう性質なのかまでは捕捉できません。」

まあ、予測していた範囲だから驚きはしないが、まさかここまではっきりとシールドが張られているとは…。

「我々はあの特殊なシールドをセビリア・フィールドと呼んでいる。」

バルチェは分かっていたという言い方をしながらも、クリオンが通り抜けた事実をまだ疑っているかのようにだった。

「セビリア・フィールド…。」

「ああ、最初に確認したのがセビリアと名づけられた小惑星だったんだ。その後、何度となくあのフィールドの内側に入ろうとしたが、無理にフィールドに触ると消滅することもあって未だ解明されていなかったんだ。連邦政治局ではトップ扱いになっていたようだから、情報部の一部の担当者にはしか伝えられていないだろう。」

まあ、たとえトップ扱いの情報でなくても、木星あたりの田舎に引っ込んでいる者にそんな情報が来るわけがない。

「しかし、有視界から消えたと言うことはあのフィールドを抜けたと理解していいのか？」

「おそらくはな…。今までなら小惑星その物も一緒に消えていた。逆にクリオンが消えたということは小惑星に無事に侵入できたということだろう。」

不意に指令室内に緊張が走る。どうやらオペレーターが何かをキャッチしたらしい。コンソールのインジケーターが激しく点滅を始める。

「例の震動波と同じものです。モールス変換を使用します。」

オペレーターの間を走り回っていたミクラがバルチェの横に戻ってきて報告する。さっき提示したばかりのモールス符号を既に *POWLA II* に打ち込んだらしい。メインスクリーンに文章が映し出される。

「クリオンと合流。狼煙の合図を待て。」

グレンからの連絡だ！しかし、狼煙の合図とはいったい何を意味しているのだろうか。よもや宇宙空間に煙を出す気ではあるまい。

「どうやら無事に合流したようだな。問題は脱出が可能なのか、そもそも脱出する気があるのか、その辺が気になるところだが…。」

バルチェが妙に意味深な言い方をする。

「脱出する気があるのか…というのはどういう意味なんだ？グレンがわざとやっている可能性があると考えているのか？」

「その可能性は大いにあるということだ。彼の性格だ、脱出不可能な場所に不用意に部下を呼び寄せたりはしないだろう。脱出する方法が分かっているながら、何かが足りないがゆえに脱出ができなかったのだとすれば、最初の連絡の時にその物を指定するはずだ。だとすれば、考えられるのは脱出する気になればいつでもできるのに、わざと何かを待っているということだ。それがクリオンの

中にあればいいのだが……。」

バルチェの言うことはほぼ合っているだろう。反論する余地もない。私は黙ってバルチェの説明に頷くしかなかった。

グレンはクリオンと合流した。二度目の連絡でもとくに何かを要求するような内容にはなっていない。だとすればクリオンが合流したことで用が足りたということなのか？クリオンの中には *POWLA II* が搭載されている。しかし、それくらいはグレンの船にも搭載されていたはずだ。そんな物を待つような性格ではない。柴野大尉を待っていたのなら初めから柴野大尉を連れてくればよかっただろうに……。

ここで再び何かの意思が心の中を駆け回る。さっき感じたものと同じだ。何かが足りないと誰かが叫んでいる。なぜグレンは私をここに呼び寄せたのだろう？どうしてモールス信号で連絡が取れていることが分かっている現在でさえ、今度は狼煙を使うと言っているのだろう。狼煙の方がもっと原始的で不確実だというのに。

原始的……、不確実……、もう少しで答えが出かかっているのだが、何かが邪魔して答えが出てこない。いや、自分自身が認めようとしていないだけかもしれない。おまえには本当はそんな能力などないだろうに……。

不意に目の前がゆっくりと暗くなる……。

第六章 「狼煙の合図」

H17. 25. DEC

第七章 「遅れてきた笑顔」

いま目の前にいるグレン大佐を怒る気にはなれなかった。長年の経験から情報部員に何を言っても無駄なことはよく分かっている。しかも、相手はその情報部のトップなのだ。どうせ、何か言ったところではぐらかせれるだけだろう。

「よく来てくれた。まあ、ゆっくりしていってくれ。」

グレン大佐とは何度か顔を会わせた事もあるし、直接ではないにしても話しをしたこともあるけど、こんなに愛想の良い人という印象はまるでない。むしろ無愛想の塊のような、そう強いて言えば信州局のホトギ局長と無愛想さでは連邦政治局内でも一位二位を争うんじゃないかとさえ思えるほど。まあ、私の印象が間違っていないことは三好せんぱいの顔を見ていれば確かだろう。

三好せんぱいは目を丸くしてグレン大佐を見つめている。まるで間違い探しでもしているかのような感じだ。情報部員のことだし誰かの変装としたら、変装した相手の性格まで真似しなければ大間抜け…と言ってやりたいところだ。

「ねえ、三好せんぱい、あれ本当にグレン大佐ですか？」

グレン大佐がシバちゃんと話している間にそっと三好せんぱいにだけ聞こえるように耳元で囁く。

「いや、分からない。」

やっぱり三好せんぱいも疑っているのか…。でも、シバちゃんが普通に話しているし、たぶん本物のグレン大佐なんだろうな。

あたしたちが着いたこの場所は不思議なことに大気があるし、空も青いし、建物は何もないけど膝くらいまでの高さで草が生えている。気候は初夏の陽気で気持ちのいい風も吹いている。小惑星帯に降りたとは到底思えないような風景。むしろグレン大佐の態度よりこっちの方が不自然かもしれない。

でも、あたしはこの場所をよく知っていた。いや、覚えていると言った方がいいかもしれない。あたしが最後にシュレーにあった場所。シュレーからもう来ないでくれと言われたあの場所だ。あの時はどこから心地よい音楽も流れていたような気がする。しかし、どうしてあの場所がこんな所にあるんだろう。

「どうやら、あたしたちはもう一人会わなきゃいけないみたいよ。そして、おそらくそこに今回の本当の答えがあるはず。」

シバちゃんが妙に意味深な言い方をする。むしろこういう時のシバちゃんは既に答えを知っていて、あたしが考え込んでいるのを楽しんでいるようなところがある。でも、今回に限ってはなんとなくあたしは答えが分かるような気がしていた。

「もう一人って、他にもここに来ている人がいるってということ？」

「うん、グレン大佐はどうやらその人とあたしたちを引き合わせたかったらしいの。どうしてかっていうと、その人はここから動けないらしいから、あたしたちがここに来るしかなかったって訳。」

いや、それでも訳が分かんない。それならこんなことをしなくてもよかったはずなのに、グレン大佐の力を持ってすれば、単にシバちゃんを呼んであたしと合流させた後にここへ来ればよかったのに…。

でも、今回は誰がシバちゃんを呼んだんだろう。そう、たしかワキさんのはず。でも、ワキさん

はここにいない。前回もこの場所にあたしと一緒にいたのは三好せんぱいだった。いつもいつもワキさんは後方において、前衛にいるのはあたしたちなのだ。

「三好せんぱい、和岐さんとは連絡がとれますか？」

「いや、無理だろうね。この妙なフィールドの中で *POWLA II* は使えないだろうし、俺にモールス信号は扱えないって。でも、グレン大佐なら連絡が取れるんじゃない？」

三人が一斉にグレン大佐の顔を見る。グレン大佐はここまでのあたしの台詞を楽しそうに聞いていたみたい。どうやらあたしの推測が間違っていなければ、あたしたちはここまでのところ正しい道順を辿ってきているようだ。だが、ここから先はあたしがやらなくてははいけない。あたしが最後の謎解きをする必要があるのだ。

「グレン大佐、これはあたしの推測でしかないのですが、おそらく三好せんぱいがここにいるのはグレン大佐にとっては誤算だったのではないですか？」

「そうかもしれないな。しかし、外にはイチノセが来ている。そうだろう？」

グレン大佐はニヤッと笑って、肯定とも否定ともとれる回答をする。たしかに市瀬大尉がここに来ていたという以上、あたしの予測でもこの賭けは成立するはずだ。だけど、市瀬大尉はどうやっても三好せんぱいではない。情報部なら誰でもよいという訳じゃないのだ。三好せんぱいでなくてはならない任務がある。誤算だけどこに三好せんぱいがいることで確率は随分とよくなっているような気がしていた。

「ワキを立ち合わせたかったらおまえの判断でそうすればいい。だが、それは今回の謎解きの後だ。謎解きにワキの力を借りることはできないぞ。」

どうやらグレン大佐は和岐さんにはこの謎解きをさせたくないらしい。だけど、私が希望すればすぐに呼べる場所において欲しかったんだ。まあ、グレン大佐のことだ、あたしたちの出生の秘密を知っていても不思議はないし、そういう意味では信頼するしかないんだろう。

「答えは 99%分かっています。誰がここで待っているのか、あたしたちが会うべき相手が誰なのかね。」

三好せんぱいは目を丸くしている。ここまで情報が揃っていて答えが分からないのって三好せんぱいだけのような気がするけど……な。まあ、だからこそなんだけど……。グレン大佐は楽しそうにあたしの次の台詞を待っているし、シバちゃんは次の行動のための準備を既に始めている。

「あたしはずっとシュレーに会いたくて彼らを捜し続けていました。たとえ彼らの所在が分かっていたとしても会えないのを知っていながら……。でも、おそらくはそれをあたしより先にやってのけてしまった人がいる。その人はあたしと同様にシュレーを捜していて、そしてあたしとはまったく違うやり方をしたはず。」

あたしはシュレーに会うために連邦政治局に残ったのだ。でも、その人はシュレーに会うために連邦政治局から離れた。あたしはいま初めてそのことが分かった。そして、いつもあたしの傍にいてくれたのかもしれない。

「最後の 1%はどうして彼女がここから動けなくなってしまったのか、それがどうしても分からない。」

「彼女?!」

そう彼女……。あたしとシバちゃんにとってかけがえのないパートナーであり、そして出生を同じくして、いつも一緒にいた *My a*。

「そこまで分かっているならば正解も同然だろう。シバノ大尉とともに彼女に会ってきなさい。ミヨシは私と一緒にここにいるんだ。」

「しかし…。」

三好せんぱいは、おそらく状況がまだ分かっていないのだろう。なぜグレン大佐が残るように指示したのかが分からず、あたしの顔とグレン大佐の顔を交互に見て絶句している。

「あそこに小高い丘が見えるだろう。彼女はその向こうにいる。」

グレン大佐が指差したその先には少しだけ高くなっている場所があり、その向こうには見事なまでの青空と白い雲が見えている。どうして小惑星にこれだけの大気があるのは本当に不思議だけど、あの猫たちの能力だとすれば今は納得しておくしかない。

「シバちゃん…。」

既にシバちゃんはあたしの横にいて、いつ歩き出してもいいように待っていてくれた。あたしは大きく頷くとあの小高い丘を目指して歩き出した。足元はずっと背の低い草が生えていて、風が吹くたびに模様を描いていく。

「シバちゃんは初めから知っていたの？」

「まあね、彼女からのハガキを見た時にすぐ分かったもの。」

「ハガキ？」

「あら、明子ちゃんも貰っていない？この風景の絵ハガキを。明子ちゃんならすぐにこの場所のことだって分かっているんだと思ってたんだけど。」

「ハガキなんて貰ってないよ。じゃあ、和岐さんもそのハガキを見てここに来たのかな。」

「それはグレン大佐の仕業みたいよ。自分で連れてきておいて、立ち会っちゃ駄目だなんて、随分と意地が悪いなと思ったけどね。」

最後の1%で引っかかっていたのはそのハガキのせいか…。たぶん、最初にそのハガキをきちんと受取っていたなら、ここまでの過程でこんなにイライラすることもなかったように思える。いったい、私のハガキは何処へ行ってしまったんだろう？

もう少しで丘の頂上にたどり着くというところで急に足が動かなくなった。

「どうしたの？」

先に行きかけたシバちゃんが気づいて戻ってきてくれる。

「ううん、なんでもない。」

でも、自分の意思とは関係なく足が前に動こうとはしない。

「ここまで来て怖気づいた？」

「そんなんじゃないって！」

…と言ってみたところで、台詞と行動が一致していない。ここで何を言ってもシバちゃんにはお見通しと思っていても、そんなことは意地でも言いたくない。

その時、不意に近くの草が揺れて1匹の猫が姿を現した。ゆっくりと近寄ってくると慣れた調子であたしの肩に乗ってくる。

「シュレー…？」

「みんな待っている。早く来い。」

音声というより頭の中に直接響いている感じ。少しばかりエコーがかかっている。シュレーはペロッとあたしの頬を舐めると、肩から降りて先に歩き出す。

シバちゃんはニコッと笑って肩をすくめるとシュレーと一緒に先に行ってしまう。

ここまで来て何を躊躇っているのだろう。ここは自分が来たかった場所のはずなのに…。それともMyaに会うのが怖い？うん、そんなことはない。頭の中でグルグル回っているのが分かる。そして、それが何も意味をなしていないのも分かっている。すべてはあの丘の向こう側から始まるんだ。

もう一度、ゆっくりと自分の足を動かしてみる。…動く？右足を真上に、そして左足を…。しばらくその場で確認するように足踏みをして…。そして、一気に丘を駆け上がる。

視界いっぱい広がる金色の草原。猫たちがあたしの目の前に集まっていて、1匹1匹が少しずつ金色に輝いている。そして、猫たちは1本の大きな木をとり囲んでいた。シバちゃんは既にその木の前にたどり着いていてあたしを待っている。でも、Myaの姿は見えない。

少しばかりの不安をかき消すようにあたしは登った時と同じように一気に駆け下りる。猫たちは器用にあたしを避けてくれて、あたしはあっという間にシバちゃんの元に追いついた。

「随分とゆっくりだった割には息が荒いわね。」

キャットテイルXではほとんど運動してなかったからなあ。

「ハアハア、Myaは？Myaはどこにいるの？」

「あら、Myaなら目の前にいるわよ。」

「え？」

シバちゃんの視点をテンテンと追いかけて、そして不意にMyaの顔がそこにあることに気がつく。

「やあ、お久しぶりです。」

「Mya！」

気を失うかと思った。そこにあったMyaの顔は、大きな木の中にあった。Myaの身体が木に取り込まれていて顔だけがそこから出ているような感じ。いや、Myaと木が一体化していると言った方が早いかもしれない。

「なんで？」

「まあ、いろいろとありまして。そういう訳でお二人にはどうしてもここに来てもらう必要があったのでハガキを出したんだ。」

そう言えば思い出した。

「ハガキなんて貰ってないわよ。」

「あれ、変だなあ。ちゃんとグレン大佐に出してって頼んだのに。」

はあ…身体中の力が抜けてきた。

「シバちゃーん…、あたし、もう嫌だ…。どうして、この娘は…。」

その場で座り込んだ。もう立っている気力も残っていない。いくらなんでもあたしの常識の範囲から飛び抜けすぎている。あたしがMyaを心配していたことはあたしが勝手にやっていたことだからいいとして、Myaが木になろうが何だろうが関係ないけど、どうしてどうしてそんなにもあんなは普通なんだ。

「明子ちゃん、悪いけど、こんなことでくじけている場合じゃないんだけどな。なんでシュレーたちがあたしたちと会う気になったのか、どうしてMyaがこんな姿になっているのか、これからこの世界で何が起きようとしているのか、話しをしなきゃいけないことが山のようにあるんだから。」

そうだね…、その通りだと思う。でもね、でも…。

「しかも、それほど時間もないんだ。もうすぐマックスウエルが起きてしまう。あいつが起きたら最後、あたしもこのフィールドを支えていられるかどうか分からない。」

「え、マックスウエル？フィールド？」

「キャティではセベリア・フィールドと呼んでいるはずだよ。このフィールドはいまあたしが支えているんだ。そのためにこんな姿なんだけどさ。」

*My a*がフィールドを維持している？何のために？

「ああ、そんな説明じゃ明子ちゃんが混乱してるじゃない。そうじゃなくて、*My a*はあたしたちを侵入させないようにこのフィールドを張っているんじゃない、マックスウエルという怪物をここから外に出さないように捕獲しているのよ。」

「で、シュレーたちでもそのマックスウエルとやらは処理できないんだ。だから、あたしたちと協力して何とかしたいということ？」

「さすが、明子ちゃん、物分かりがよくて助かるなあ。」

また、頭の中がグルグルしてきた。*My a*の言葉に何か言い返そうとして、ゆっくりと目の前が暗くなっていくのを感じていた。シバちゃんが何か言っているようだけど何を言っているか聞こえない。

第七章 「遅れてきた笑顔」

『私の手紙はいま何処に』

—天高く猫眠る星Ⅱシリーズ 1—